

第6講座 古文

活用のある自立語

自立語 単語は、単独で文節を作ることができる自立語と、必ず自立

語と一緒にいっしょになって文節を作る付属語とに分けられる。

(例) もつと(自立語) 広い(自立語) 公園(付属語) が(付属語) できる(自立語) らしい(付属語) よ(付属語)。

用言 活用し、単独で述語になることができる自立語を用言という。

用言には次の品詞がある。

① 動詞：動作・作用・存在などを表し、「ウ」段の音で終わる。

② 形容詞：物事の性質や状態を表し、「い」で終わる。

③ 形容動詞：物事の性質や状態を表し、「だ・です」で終わる。

用言の活用の種類

清潔だ	白い	する	来る	上げる	起きる	呼ぶ	基本形
せいけつ	しろ	(する)	(くる)	あ	お	よ	語幹
だろ	かる	させし	こ	げ	き	ぼば	未然形
にでだ	うくか	し	き	げ	き	んび	連用形
だ	い	する	くる	げる	きる	ぶ	終止形
な	い	する	くる	げる	きる	ぶ	連体形
なら	けれ	すれ	くれ	げれ	きれ	べ	假定形
		せしろ	こい	げげ	きき	べ	命令形
(動詞)	(形容詞)	変格	カ行	下一段	上一段	五段	活用の種類

(1) 次の文章中の——線ア～セを動詞・形容詞・形容動詞に分類し、

記号で答えなさい。さらに、あとの①・②に答えなさい。

湖畔こはんの道みちは、やわらかな霧きりの中に、白くしろくどこまでもどこまでも続くつづく。こういう人ひとりひとひとりいない道を静かに歩くしずかにあるくのは、往來わうらいの激しい都会きがいなどで、せかせかとあわただしく歩くあわただしくあるくのに比べくらべると、別世界べつせかいのような感じがするする。しんとしんとして、清らかしみずかで深い山やまを行く趣おもむきがある。

動詞

形容詞

形容動詞

① 次の活用の種類にあてはまるものを、分類した動詞の中から選び、記号で答えなさい。(あてはまる動詞がないものには「なし」と書きなさい。)

カ行	五段		
変格		上一段	
	サ行		下一段
	変格		

② ——線ア・エ・オ・力の語の活用形を答えなさい。

ア			
エ			
オ			
力			

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

八月二十九日善光寺参り。

本堂の柱に、長崎の旧友たれかれ、八月二十八日参るとしてありけるに、今は三十年余りの昔ならん、おのれかの地にとどまりて、一つなべのもの食ひて笑ひののしり、むつまじき人たちなり。あはれきのふ参りたらんには、面会して、こしかた語りて心なぐさまんものを、互ひに四百余里の道程へだたりぬれば、ふたたびこの世には逢ひがたき齡にすれば、しきりに慕はしく、なつかしくなむ。

(小林一茶『父の終焉日記』)

問一 線部「あはれ」を現代かなづかいに直してひらがなで書きなさい。

問二 線①「しるしてありける」とありますが、どのような内容が記されていたのですか。現代語で書きなさい。

問三 線②「かの地」とはどこですか。文中から書き抜きなさい。

問四 線③「一つなべのもの食ひて」とありますが、「一つなべのもの食う」とは何をたとえた表現ですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

- ア 貧しい暮らしぶり。 イ 横着な生活態度。
ウ 激しく争うこと。 エ 親密な間柄。

問五 線④「むつまじき人たち」を別の言葉で述べている部分を文中から九字で書き抜きなさい。

問六 線⑤「きのふ」とはいつのことを指していますか。文中から書き抜きなさい。

問七 線⑥「こしかた」の意味として最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

- ア やって来た道中。 イ 今までの出来事。
ウ 昔の友人たち。 エ 現在の様子。

問八 線⑦「しきりに慕はしく、なつかしくなむ」とありますが、なぜこのように思うのですか。現代語で二つ書きなさい。

問九 筆者は、善光寺を八月二十九日にお参りしたことを悔やんでいます。筆者はどうしたかったかと思っていますのですか。現代語で書きなさい。

練習問題

1 次の古文と現代語訳を読んで、あとの問いに答えなさい。

〔古文〕

傍かたわらよりいふいふことは、いとよく当るものなり。かの人は衰おとろへたまひしといへど、鏡かがみ見てもさは思はず。①「彼かれは今かくすれど、後のちには悔くおもふべし」などいへど、知らざるものぞかし。私の心だになくば、傍かたわらにて見ると同じかるべし。②
(松平定信『花月草紙』)

〔現代語訳〕

傍かたわららの者が言うことは□。「あの人は衰えなされた」と言うけれど、鏡を見てもそうは思わない。「彼は今このようにしているけれど、後で悔くいるにちがいない」などと言うけれど、それに気づかないものなのだ。③
 自分自身にとられる心さえなければ、傍かたわららで見ているのと同じだろう。

問一 〰〰線A「いふ」・B「たまひし」を現代かなづかいに直してひらがなで書きなさい。

A

B

問二 現代語訳の□にあてはまる言葉として最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

- ア たまには当たることもある
- イ かならず当たるものであった
- ウ たいへんよく当たるものである
- エ 半分は当たるのかもしれない

□

問三 〰〰線①「さは思はず」とありますが、だれが「そうは思わない」のですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

- ア 言われた当人。
- イ 傍かたわららで言う人。
- ウ 筆者。

□

問四 〰〰線②「傍かたわらにて見ると同じかるべし」の意味として最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

- ア 傍かたわららで見ると同じように、無責任なことを言うだろう。
- イ 傍かたわららで見ると同じように、年老いていくものなのだろう。
- ウ 傍かたわららで見ると同じように、後悔こうかいすることはわかりだろう。
- エ 傍かたわららで見ると同じように、自分のことがよく分かるだろう。

□

問五 〰〰線③「自分自身にとられる心」にあたる古文中の言葉を、書き抜きなさい。

□

問六 古文中に「(カギ)をつけられる会話文が一か所あります。その部分の初めと終わりの三字を書き抜きなさい。

□

